

どうも！

来

日する外国人に、日本で必要な言葉を一つだけ教えてくれと言われたら、何を選ぶだろう？——そんな言葉を考えてみるのも楽しい。「すみません」なんかはお礼でもお詫びでも呼びかけでも使える便利な言葉で立派な候補だ。ただ、ふだんの挨拶ではちよつと使えないという欠点がある。朝、出会い頭に「すみません」などと言うと、向こうは呼びかけられたと思ってしまう。

そこでもう一つ考えられるのが「どうも」。「どうも」はお礼でもお詫びでもなんとか使えそうだし、出会いでも別れでも一応の挨拶になる。まことに便利。どうです？ 昨日か今日、どこかで「どうも」を使っているんじゃないですか？

もつとも、家族などの親しい関係ではあまり使わない（家族関係は人それぞれだが）。子どももあまり言わない。三、四歳ぐらいの幼児に「どうも！」なんて言われると、ちよつとびつくりしそうだ（お店屋さ

んごつこなら大丈夫？）。小学校なんかでも、よい子は、「おはようございます」と挨拶するが、「先生、どうも！」などという挨拶はしないように思う。もつとも、程度を強調する「どうも＋ありがとうございます」などは別だ。これなら小学生でも言うことはあるかもしれない。とにかく、「どうも」だけで終わる挨拶はちよつと違って、妙にオトナくさくなるのである。

なぜだろう。「どうも」は本来「どう＋も」だが、この副詞には「どうもうまくいかない」「どうも変だ」のような使い方があり、いわば気がかりなことがすつきり収まっていなない感情を表すのである。それが「いやはや、どうも何と言っているのか、（ありがとうございます・申し訳ありません）」などというように、感謝、謝罪の気持ちの「そのままでは済ませられないという感情の強調」という使い方になったものと考えられる（その点、気が済まない感を表す「すみません」の発想にも微妙に通じている）。

早稲田大学教授

森山卓郎

「いやはや、どうも、何と言ったらいいか、むにやむにや……」というような感じで、いろいろと相手への思いを巡らしていることを表すので、実質的な感謝や謝罪の表現がなくても、「どうも」だけで、そういう気配りが示せる。このよそ行き感が、さらに、出会いや別れの軽い挨拶にもなる。

「どうも」だけだと、実質的な感謝や謝罪の表現がないので、きちんとしたお礼やお詫びにはならない。が、逆に軽い挨拶をするにはぴつたりとも言える。出会いや別れなどの場面でも、「さようなら」などと実質的に言わないで、その気配りだけをそれなりに丁寧に表示する。そして、そのような気配りのコミュニケーションをするのは、かなりオトナ的ということなのだろう。

というわけで、「どうも」の奥には、どうもオトナの深い気配りがありそうだ。それじゃ、ここらで。はい、どうもー！